

前方より養ひ不仕事悪敷とて仕よし申上げるに、さんく御機嫌悪敷、にくきやつと御叱り、あたまを御杖にて御たき被遊候て被爲入候。喰違ひの柴垣を御廻り成さる、御後影の見にけるに、加左衛門あたまをなで、御露地者共に向ひ、御主は是非なき物也、傍輩ならば安房守殿にても只一打に可仕物をと申すを、御聞被成御入候。翌日加左衛門を被召出、御用向情に入相勤候由被仰出、五十石加増知被下と、近藤小左衛門咄承る。とあり。右御花島とて菊を作らしめらる、島地も、若しは本丸下の御花畑の地ならんか。又武家耳底記に、利常卿の時江戸にて、御花島へ出給ひ御逍遙ありけるに、梅花の快く咲きたるを御覽被成、御近邊に被召仕者を召され、山作りの理右衛門を呼びて、梅花を一輪も残さずもがせ、事の外賤しきとの御意也。理右衛門参りけるに、御露地を御巡り被成、花共を悉くもぎて捨てさせ給ふ。其頃諸士の面々花をすき、染井の花屋より色々の花を買寄せて賞翫せしかど、是より花すきひしと止みたり。一年許立ちければ、花を翫ぶ人一人もなし。若き者共江戸詰して物入の上に、いはれぬ花を好み銀子を費

す。依て我等大分の勘略をして取らせたり。今は銀も不入、却て悦ぶべしと御意也。といふ事も見ねたれば、利常卿の時代は、都て草花花樹を植を置ける地をば、御花畑と呼びたりけん。

○車橋門

此の門は東丸高石垣の角、御花畑の地より百間堀往來の方へ出づる口に小門ありしを、廢藩後明治十年に此の門を除き、石垣をも切崩し、柵を作りて今の如く成りたり。往古は此所に車橋ありし故に、車橋門と呼べりといへり。金城深秘録に、東御丸等之部、内車橋御門足輕番所。石川御門外之部、車橋外御門。と載せたり。按ずるに、綱紀卿の時、越中組大工肝煎與三右衛門父淨雲と云ふ者、八十七歳にての口演書に、本堂形近藤甲斐守屋敷跡に御書院ありし頃は、御書院より北の方、御堀折目より十四・五間許上の方に、長さ七・八間許、幅六・七尺許の橋あり。大石垣の方より七尺許引き上ぐるやうに致し有之。其頃車橋と云ふ。其所より御本丸へ上る坂有之やうに覺ゆるよし記載し、古覺の繪圖をも取添へたり。其の圖を以て勘考するに、今いふ

車橋門臺の石垣續きなる石垣の角に、其の橋形を圖したり。されば則ち今いふ車橋門の事なるべけれど、繪圖面の書きやうにて、少し所違へる如く見ゆるならんか。關屋政春古兵談に、寛永八年犀川河原町より出火にて、城内炎上の時、利常卿の使命を蒙り、本丸の火藥藏如何と走りゆき、薪丸より車橋への坂を下るに、加藤圖書・津田勘兵衛其外四・五人同道して來るに往き合ひけり。勘兵衛・圖書は堂形の米藏に居りて、右藏に火懸りたるに依りて、車橋を渡り御城へゆくとして、御使者の者に行き合ひたりとのよしを記載す。然れば此の時、加藤圖書等が車橋を渡りて、堂形の米藏より來りたりと載せたるにても、今いふ車橋門なる事知られけり。車橋といへる橋梁は、車仕懸けにして挽出し挽入る、やうに造りたるものにて、城郭の要害にまうけたるなりといへり。谷川士清の倭訓栞に、橋に石橋・土橋・板橋・圓木橋・高橋・浮橋・折橋・懸橋・反橋・舟橋・棚橋・吳橋・韓橋等の名あり。野史に、推古帝の時歸化せし路子工又巧掛長橋、令造遺三河國八瀝長橋、水内曲橋、木叢梯、遠江國濱名橋、會津關川橋、兜岩猿橋等と見ねたり。とあり。按ず

るに、車橋も路子工などの造り始めたならんか。

○稻荷屋敷

此の地は薪丸の西南なる下段にて、堀縁の細長き纒かの地所をいへり。三州名蹟誌に云ふ。稻荷屋敷は、金澤築城以前より此の林中に稻荷の舊社ありしも、往昔府城普請の時、味噌藏町稻荷橋の明地へ當分遷され、其後眞言宗眞長寺の境内へ遷座し、眞長寺へ預けられたり。其頃眞長寺は古寺町惣構川端今の富永權承の居屋敷にありしを、其後野町の後へ所替す。故に稻荷眞長寺と稱し、稻荷橋の名も于今呼べり。といへり。三州志來因概覽附録に云ふ。稻荷第は此の地に古より稻荷神社ありしを、築城の時假に稻荷橋邊の閑地に勧請あり、元和八年眞長寺境内に安置す。此の時眞長寺は、古寺町惣構端、今の富永右近右衛門宅地にあり。此の故を以て今も此の稻荷第跡の古木、風雪に折摧等あれば、其の枝等惣て眞長寺へ引取るなり。稻荷第の地、今は廢地にて草蔓のみ依然たり。細長き纒かの間なり。一説には、淺野川端天道寺稻荷社地も、舊地は稻荷橋今の岩田内藏助宅地の所に在りしと云ふ。可併稽。と。平次按ず